

放 牧

ウシを草地で飼育する放牧の方法としては、飼料資源の牧草などを求めて2か所以上の牧草地の間を移動する「遊牧型」と、定住しながらウシを牧草地に放牧する「定住放牧型」があります。

遊牧型のシステムは、アフリカ、中近東、中央アジア、モンゴルなどの乾燥帯に広く分布しており、遊牧民にとっては、牛乳が重要な食糧源となっています。

定住放牧型は、主にアメリカやオーストラリア、南アメリカで行われている「大農場で肉生産を目的とする粗放なシステム」と、ヨーロッパやオーストラリアの一部、ニュージーランド、日本の北海道などで行われている「中小農場で乳肉の両方を生産する集約的なシステム」の2つに分けることができます。後者においては、通年の放牧ができない寒冷地において冬季に舎飼いが組み合わされることもあります。

このほか、季節移牧型システムとして、雨季に放牧地、乾季には雑穀の刈跡で放牧を行うアフリカの遊牧民や冬に低地、夏には高地と垂直に移牧を行うスイス・アルプス地方の例があります。また、最近では東南アジアにおいてココナッツやアブラヤシのプランテーションにウシを放牧して、下草を飼料として利用するシステムなども見られます。

人工草地や野草地などに草食家畜を放して直接草を食べさせる放牧は、刈取利用のできない傾斜地も使用することができ、土・草・家畜を有機的に結合させる草地利用の本来的な姿といえます。舎飼いに比べて飼養管理の労力を低く抑えることができることから、放牧はウシの一般的な飼育方法として世界中で行われています。ウシがいる放牧風景は、多くの切手に描かれています。

キルギスタンの10.00ソム切手は、家畜ヤクなどの背景に遊牧民の移動式住居であるユルトが描かれており、遊牧型の草地飼養であることが分かります。日本の牛切手のほとんどは、放牧されているウシが描かれたものです。2010年発行の小型シートは、北海道をテーマとするふるさと切手であり、4枚の牛切手が含まれていますが、一見して集約的な定住放牧型であることが見て取れます。ホルスタインの放牧風景が描かれた切手は、日本人がイメージする一般的なウシの飼育形態に最も近いのではないのでしょうか。一方、1970年の15円切手と1985年の60円切手に描かれた黒褐色のウシは、恐らく、黒毛和種の繁殖牛や育成牛でしょう。黒毛和種の飼育形態は、一般的に舎飼いによる小規模飼養ですが、1960年代以

降、畜産の振興を目的として、春から秋の期間、家畜の^{よたく}預託放牧を行う公共牧場が全国に設置されました。繁殖牛を放牧すると適度な運動やストレスの低減により、受胎率の向上や発情間隔の正常化、難産の低減など繁殖機能の正常化が期待でき、育成牛では、内臓器官がよく発達し、肥育期間に入っても飼料の食い込みがよく発育がよくなります。しかし、公共牧場の多くは奥山に位置しており、最近では利用率が低下し、草地の荒廃が進んでいるといえます。日本では農業人口と耕作地が減少した結果、里山環境の劣化が問題となっていますが、環境との共生を意識して生態系を適切に制御する放牧を耕作放棄地の管理に利用する取り組みも始められています。

欧州で発行された切手には、日本の牛切手と同じような牧歌的な定住放牧型の風景が描かれており、ガーンジー島やポーランドから発行された切手などは、人工草地のようです。これに対して大洋州、北米、中南米やアフリカの切手に描かれた景色は、野草地に放牧しているように見えるものがあります。アジアやアフリカの乾燥地帯で進む砂漠化の原因の一つに過度の放牧があげられており、南アメリカでは放牧地を開くために熱帯雨林が20%消失したといえます。放牧は適切に行わないと環境破壊の原因ともなりかねないことから、地域の生態系に配慮した方法で行う必要があります。

エチオピアの切手は、雑穀（テフ）の栽培をテーマとする3枚のシリーズのうちの一枚であり、刈り取った後のテフの畑にウシを放牧している場面かウシに踏ませて脱穀をしている様子のいずれかと思われます。アルジェリアとマダガスカルの切手も農耕地に放牧されたウシであり、耕作と組み合わせた季節移牧型の草地飼養の様子が描かれています。